

# 小樽クイズのアプリ開発 樽商大生、あすイベント

原口和也准教授(中央)とアプリを制作した学生ら



小樽商大の原口和也准教授(39)のゼミ生4人が、小樽に関するクイズゲームなどのアプリを開発し、17日午前10時半〜午後1時、小樽運河プラザ(色内2)で景品交換イベントを開く。

アプリは2種類。「たるあるき」は小樽に関するクイズに回答するゲームで問題は20問。内容は実際に学生が小樽市内を歩きながら

独自に考えた。「オタルトンプズル」は、提示された単語を指定のマス目に入力していくパズルゲームで、全て小樽に関連する単語でつくられている。全11問。アプリは5〜10月に4年生の平山智浩さん(22)、岩崎拓人さん(22)、今紺谷拓也さん(21)、西島善治さん(22)が制作した。スマートフォンに無料でダウンロード

ドできる。  
イベントは小樽商大主催。アプリが市内の観光に与える影響などを検証する目的で、アプリのクイズやパズルを解くと、玩具のハンドスピナーなどを受け取れる(先着100人)。  
岩崎さんは「楽しみながら小樽に詳しくなれるアプリです。ご来場下さい」と呼びかけている。当日はJR小樽駅コンコースで学生がタブレット端末を持ち、アプリの紹介もする。  
(徳留弥生)

# 小樽の名所 アプリで紹介 商大生開発 クイズ形式の催し



JR小樽駅で、観光客にクイズゲームアプリの説明をする小樽商大の学生(右端)

小樽商大の学生が開発した小樽に関するクイズゲームのアプリを使った景品交換イベントが17日、小樽市内で初めて行われ、観光客らが名所などにちなんだご当地ゲームを楽しんだ。

観光名所の写真などを使って小樽の知識を問うクイズ「たるあるき」などアプリは2種類あり、同大社会情報学科の原口和也准教授(39)のゼミ生4人が開発した。イベントは原口ゼミの主催。スマートフォンに無料でダウンロードして遊

ぶ。一定の回答数を得た人には、大正硝子館のガラス小物などの景品が配られた。

学生たちはJR小樽駅でチラシを配るなどして、観光客らにアプリの使い方を説明。景品の交換は運河プラザで行われた。川崎市から旅行に來ていた山野井理奈さん(23)と母のつや子さん(52)は「これから2人で巡ろうと思っていた名所が出題されたので、楽しく挑戦できました」と笑顔で話した。  
(元井麻里子)

小樽商科大学学生サークル・小樽笑店(尾崎航代表)は、12月16日(土)13:00から17:00まで、小樽市産業会館(稲穂2)2階で、「たるわランド2017冬~おいでよスノーワールド」を開催した。

このイベントの活動理念は、小樽笑店に関わる全ての人を笑顔にし、冬をモチーフにしたイベントを企画・運営することで、小樽に住む人々を活性化させることを目的としている。

運河公園で開催のたるわランド夏が終わった9月から4ヶ月間、案を練り準備してきた。7つのブースを設置し、1・2年生55名がスタッフとなり対応。子ども達は各ブースをハシゴして楽しみ、スタンプを集めた。



田中遙太副代表(2年)は、「やってみるまでは、お客さんが来てくれるのが心配だったが、楽しそうな顔を見て、準備してきた甲斐があった」と話し、深川瑞稀副代表(2年)は、「1・2年生だけで構成し新体制で初めてのイベント。楽しんでいただければと思う」と話した。

クリスマスをモチーフにした的を倒す対戦型の射的、銅の具材に見立てた空き箱をどれだけ高く積み重ねることができるか挑戦するコトコトツなべたわぁゲーム、5つのバック

をピザに見立て、かまくらにゴールするホッケーゲームなど、子どもから大人までが来場し、手作りゲームを楽しんでいた。

また、流行のハンドスピナーを、ペットボトルのキャップ等を使い製作するコーナーでは100個分を用意。人気を集めていた。

成年にちなんだブードル・剣・花・熊のバルーンを配布。同大外部団体の室内管弦楽団やアカペラサークルAIRS、マンドリンオーケストラのプレクトラム・アンサンブルが演奏会を開いた。

坂田菜緒さん(5)は「ハンドスピナー作りが楽しかった」と話し、母親は「手作り感が満載」と一緒に楽しんでいた。

同サークルは、夏と冬に自主イベントを開催。市内で開かれる小さな祭りから大きな祭りまで協力している。



●関連記事



# 市の人口 小樽と11人差

## 11月末 良好な住環境など追い風

【江別】市の人口が年内にも、道内7位の小樽市を上回る見通しとなっている。11月30日現在の住民基本台帳によると、江別市の人口が前年同月比208人減の11万9073人に対し、小樽市は同1824人減の11万9084人。2015年の国勢調査で両市の差は1288人あったが、2年あまりで11人に縮まった。江別市の子育て支援策や札幌圏に近い住環境などが影響しているとみられる。(今井潤)

少子高齢化で両市とも亡くなる人の数が生まれる人の数を上回る「自然減」の状態が続く。65歳以上の高齢者の割合を示す高齢化率は11月現在で江別市が29・2%に対し、小樽市は38・

最大50万円を補助する制度を取り入れたところ、9年ぶりに転入者が転出者を上

回る「社会増」に転じた。今年も社会増になる見通しで、かつて5000人規模だった年間の減少幅は2000人規模に縮小。9月末に北見市の人口を上回り、道内8位になっていた。小樽市は自然減に加え、転入者が転出者を上回る「社会減」にも歯止めがか

かっている。職を求めて若者層が札幌や道外に流出する構図は両市とも同じだが、坂が多く宅地造成に適した土地の少ない小樽市に対し、平地の江別市はJR野幌駅南口や大麻地区で一戸建て住宅の新築工事が活発化。住環境の違いも両市の人口差が縮小している要因の一つとみられる。

三好昇市長は「教育環境の充実や街の魅力づくりに力を入れ、この流れを持続させていく」と話す。

小樽市は今秋から人口減少対策をテーマに小樽商科大と共同研究を始めた。人口減の要因分析と対策を年度内にまとめる方針で、「新たな方策を打ち出し、人口減に歯止めをかけた」（企画政策室）と話す。

(人) 江別・小樽・北見市の人口推移

